モスクワ大生、合気道部と合同稽古

ロシアのモスクワ大学の学生とオランダのアイントホーフェン工科大学の学生が相次いで生田キャンパスを訪れ、専大生と交流した。

国際交流活発に

生田キャンパス

▶ 生田キャンパスの道場で勢ぞろい

恩師ゆかりの専大で

合気道を通じて専大生とロシアの学生が交流――モスクワ大学武道クラブのメンバー17人が7月5日、生田キャンパスを訪問、専大合気道部50人と合同稽古を行った。

合同稽古は、本学合気道部師範の堀越祐嗣さん（平5法）が指導。専大とモスクワ大の学生が1対1で向き合い、さまざまな技を掛け合って約2時間たっぷり汗をかいた。初心者のモスクワ大の学生には、専大生が片言の英語とジェスチャーを交えながら技を見せて対応した。

▲ 1対1で技を掛け合う

同武道クラブ主将のボリス・ジリンスキーさん（外国語・地域研究学部修士1年）は、7歳から合気道を始め現在二段。「武道は面白くて奥が深い。稽古はとても楽しかった」と流れる汗をぬぐいながら話した。また、合気道を始めて8カ月というポリナ・セルゲエヴァさん（法学部3年）は「本場の日本で稽古をつけてもらえるなんて幸せ」と笑顔を見せた。

同武道クラブは昨年11月に設立された。本学の合気道部で活躍し、富山大師範などを務めた故高柳清孝さん（昭44商）が旧ソ連時代、モスクワで指導を始めた。ジリンスキーさんは高柳さんの孫弟子に当たる。

今回は日露青年交流センターの短期招聘事業による訪日で、6月30日から7月8日まで滞在。「ぜひ、恩師ゆかりの専大を訪ねたい」というジリンスキーさんらの希望で合同稽古が実現した。稽古のあとは、茶道文化研究会（仲林寛晃代表・商3）によるお茶会と交流会も催された。

合気道部主将の鳥羽潤さん（商4）は「モスクワ大生はみな熱心で分からないことを積極的に聞いてくる。大いに刺激を受けた」と話す。なお通訳はロシアから本学に留学しているヴァレリア・ドラプチンスカヤさん（商1）が務めた。

オランダの工科大生 ⇔ ネットワーク情報学部生

日本文化の体験も

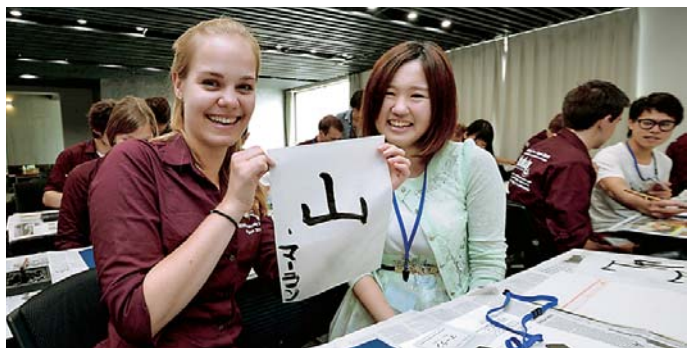
オランダのアイントホーフェン工科大学生30人が7月15日、生田キャンパスを訪れ、ネットワーク情報学部の学生らと交流した。

一行は数学、コンピューターサイエンスなどを研究する学生と大学院生で、日本に3週間の研修旅行中。ネットワーク情報学部の小林隆教授が今年3月まで同大に在外研究していたことから、専大生と触れ合う企画が用意された。

専大側は教職員と学生の総勢100人が対応。小林教授ら参加した教員は「学生たちは片言の英語でも積極的に交流していた。こういう機会をもっと増やしたい」と話している。

一行はまず、「日本文化の体験」に臨んだ。弓道場で鈴木大河さん（商4）ら弓道部員4人が的を射る模範演武を見学、吉田治弘部長（法学部教授）のワンポイント解説に耳を傾けた。

続いて、国際交流会館で茶道と書道のワークショップに参加。茶道文化の研究会の会員がたてた抹茶を味わったグループは「おいしい」とにっこり。書道に挑戦したグループは、書道研究会（小林優里代表・人間科学3）の会員と2人1組になり、思い思いに好きな文字を書き上げた。



▶ 「山」を書き上げにっこり

▶ 専大生に教わってそろばんに挑戦

さらに、ネットワーク情報学部の学生30人がプロジェクトや卒業制作で取り組んでいるテーマを紹介したほか、そろばんやかるた、折り紙のミニ講座が開催された。

中村友保プロジェクト（佐藤一輝代表＝3年次）は、制作中のウエブサイト（パートごとにアレンジの異なる音源を選び、自分好みの演奏に仕立てる）を実演。参加者の一人が同じプログラム言語を使っていることが分かり、情報のやり取りが続いた。

数学を専攻しているミイロー・デリックスさんは「同年代の日本の学生と交流したのは初めて。専大生は親しみやすく、楽しかった」と話し、笑顔で専大を後にした。

交流の模様はかわさきワンセグ（斎藤新代表＝3年次）が番組としてYouTubeに投稿。「かわさきワンセグストリーム」の検索で視聴できる。

職人尽し―大学生がみた有田・今右衛門窯―

ユニークで奥深い世界を紹介

文学部・髙島ゼミ　現地取材し展示

文学部人文・ジャーナリズム学科の髙島ゼミ（指導・髙島裕之准教授＝陶磁史）が有田焼の名門窯元、今右衛門窯（佐賀県西松浦郡有田町）で職人に聞き取り調査を行い、伝統的な分業で成り立つ生産工程を取材した。浮かび上がったのは、ユニークで奥深い職人の世界。ゼミ長の君塚彩香さん（4年次）らゼミ生5人が成果を「職人尽し―大学生がみた有田・今右衛門窯―」展（7月14～21日、サテライトキャンパス）で発表した。

「イヤホンでラジオや音楽を聞きながら作業をしてもいい」「絵付けの多少の失敗は修正できる。使うのは傘の骨を再利用して作った道具」―。今右衛門窯は、鍋島藩が将軍家への献上品などとして作らせた「色鍋島」の技術を受け継ぐ由緒ある窯元。有田焼の歴史や工程ごとの作業を説明する写真やパネルの中には、そのイメージをくつがえす意外な事実も紹介された。

調査は、有田焼の考古学を研究する髙島准教授が当主の14代今泉今右衛門氏に要請し実現。同窯の全面的な協力を得て昨年9月と今年2月の計4日間、ゼミ生らが「細工場」（成形・乾燥・仕上げ）、「染付座」（下絵を担当）、「赤絵座」（上絵を担当）などで働く職人15人にインタビューした。

「ここまで分業しているとは」（梶原茜さん、4年次）、「一つの器に本当に多くの人が関わっている」（田中光さん、同）。分業は技術流出を防ぐための藩の政策だった。土をこねる真空土練機や電動ろくろなど一部で機械が導入されたが、繊細な手仕事の連係はいまも続く。器が完成するまでの工程を描いた、約200年前の「染付有田皿山職人尽し絵図大皿」（有田陶磁美術館所蔵）とほぼ同じ流れで高級磁器が生産されている。

展示期間中の7月19日には「江戸遺跡研究会」特別例会が同所で開かれ、田中さんらが発表。「職人はおのおのに絵の具の水加減があるので、絵の具を貸し借りはしない」など、窯元関係者も知らなかった事実を織り交ぜ、参加者の関心を引いた。

▲ ろくろの回転を体験する「中心取りませんか」コーナーも

▲ 左から髙島准教授、田中さん、君塚さん、梶原さん、南部彩乃さん（4年次）

◆今右衛門窯　国の重要無形文化財保持団体。14代今泉今右衛門さんは7月に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、親子2代で人間国宝に。